

講師 延塚知道先生

はじめにー『教行信証』について

今日から皆さんと一緒に親鸞聖人の名著『教行信証』という書物を少しずつ拝読していくことになりました。『教行信証』は難しいです。親鸞聖人の処女作で、おそらく四十過ぎに流罪が許された後、関東に向かわれて、関東に入られてすぐに執筆されたと言われています。ですから四十二〜三歳位から執筆されて、『教行信証』の中の化身土の巻の一番最後のところに「我が建仁元年」という年号が入っています。建仁元年というのは、ちょうど法然聖人の十三回忌にあたる年です。ですから、おそらく流罪に遇って、その後、関東で四十二〜三歳くらいから執筆を始めて、五十二〜三歳、十年くらいかかって執筆されたと思います。

ただし、その後、長くかかって手直しをされた。それで最初にできた『教行信証』がどんなものであったのか、今は残っていませんけれども、おそらく文類という形をとっていますから、今の『教行信証』の大切なところは全部収まっていたと思われまます。七十五歳でお弟子さんに書写を許していますから、親鸞聖人が七十五歳のころには、『教行信証』は公にお弟子さんたちの中で読まれたと思われると思います。おそらくその前から読まれていたと思いますけれども、資料としては七十五歳の時に尊蓮という弟子に書写をさせています。その時に公になったというふうに考えられます。

皆さんご存知のように親鸞聖人という方は、たいへんな、天才的な宗教家・仏教者です。『教行信証』という主著は、これは皆さんのような、どっちかというとい頃あまり勉強していない人のために書

かれたものではありません。そうではなくて、専門に比叡山で学習している学僧たち、今で言えば大学の学会みたいところに書いて残した書物ですから、そういう意味で二つの難しさがある。

一つは、やはり学者として優れた人ですから学問的な手続きをとって自分の信仰を表現しているのです。学問的な手続きというのはやった者でないといけないけれども大変なのです。そして皆さんの方から聞くと「何かややこしいことをくぐくぐ言っている」というふうに聞こえるのです。ところが、そのややこしいことをくぐくぐ言っているということが、実はものすごい大切な意味があるのですが、そこまですごい読み取れないから、「なんだか難しいことを言っているなあ」というふうに感じられるかもしれません。けれども学問的な手続きをとりながら大切なことを伝えている。

ですから、一つは、今言った学問的な手続きをとっているという難しさがあります。（それは、そうですね、五年くらい聞いてみると馴れてきます。まあ一生懸命やって三年くらい聞いてみるとなれてくる。）そういう手続きがありますから、その手続きをあまり崩してお説教してはだめです。親鸞聖人に失礼になります。きちつとした手続きの中で大切なことを伝えようとしているのですから、それをできるだけ忠実にまずはお話をして、そしてそこに込められている信仰・信心、もう少し簡単に言うると皆さんの生き方、「どういふふうに生きて、どういふふうに死のうとしていのか」、そういうことを読み取っていく、という二つの難しさがあります。

だから、これから楽しみます。皆さんも楽しみかもしませんが、私も楽しみです。大きな『教行信証』の会は、お東の方では大阪の南御堂で二か月に一回。もうまる六年話をしています。最初百人以上来ていましたから、「半分くらい減るよ」と言っていたら、六年

間ぜんぜん減りません。ここは分かりませんよ。もう九州に帰りま  
すので「辞めさせてくれ」とたいぶ言ったのですが辞めさせてくれま  
せんので、今も二か月に一回は大阪に行ってお話をしています。

まあ、分からなくても、じつと座っておきなさい、寝ていても  
座っていないさい。仏教の教えというのは皆さんの頭に語りかけてい  
るのではない。黙って座っていたらしみ込んでいくから。だから、  
分からなくてもじつと座って聞いていると訳は分からないけれども  
時々感動して涙の出たりするようなこともある。それは身の方が先  
に聞いているのです。身の方が感動しているのです。そういうもの  
です。だって仏教の覚りは頭などは問題にしていない。頭を超えて  
いるのです、僕も一緒ですが、皆さんも頭はそんなによくはないで  
しょう。そんなところに入るような仏教なら要らない。そんなもの  
は救いにならない。

もともとお釈迦様の悟りというものは、私たちの分別を超えてい  
るのですから。それでも聞いているのです。「じつと聞いていたら、  
何かわからないが、感動して涙がでる」とか、「今日は来てよかった」  
とか、「訳の分からないことを言っているが何か大事なことを言っ  
ているような気がする」とか、何か少しずつ分かってくるのです。だ  
から昔の人はじつと座って聞いたのです。同じ話をなんべんも聞く  
のです。そんなふうにして身にたまっていくのです。そしてある時  
「ハッ」と分かるから。もうちょっと手遅れかもしれないけれど  
も……。

### 和讃の制作

もう一つ、親鸞聖人の『教行信証』は主著で処女作なのです。ここ  
ろが同時進行で書いていたものがあります。それが『和讃』です。七  
十六歳のときに『浄土和讃』と『高僧和讃』が完成しています。公に

なったのです。ということは、『教行信証』で伝えたかったこと、『教  
行信証』は学会向けに書いたのですから難しい手続きをとったので  
す。しかし難しい手続きをとりながら書いている核心のところ)こ  
れは田舎の人たちでも絶対わかる、それをどうしても伝えなくては  
ならない。そういうことがあつて、親鸞聖人は『教行信証』を執筆さ  
れるときに、おそらく、例えば『高僧和讃』は『高僧和讃』という  
のは七高僧というのを知っていますか。『教行信証』の行の巻に七高  
僧がずっと引用されています)、これは完全に『教行信証』の行の巻、  
その引用するときに、あまり難しいことをいうよりも、大切な文章  
を『和讃』にして歌というのはよかろうと。

皆さんも酒を飲んで歌を歌うでしょう。多分それと一緒に酒を飲  
んで歌っていたと思う。歌えるようになっていけるのです、黒田節と  
一緒にの節です。今様というのです。親鸞聖人は和歌は詠まなかつ  
た。和歌というのは貴族の歌でしょう。だから一切読んでいませ  
ん。全部今様、今様というのは今のはやり歌、この辺だったら荒城  
の月、あれが今様です。それから黒田節がそうです。それから演歌  
の歌謡曲でもそういう歌詞がある。ちゃんとある。節はどんなだつ  
たか、それはわからない。越天楽のような節だったかもしれないし、  
今、皆さんが恩徳讃を歌う時の節、ああいう節でも歌えるのです。  
それから演歌節でも歌える。

僕ら学生の頃よく歌っていた。酒を飲んでコンパしたときに、『和  
讃』を演歌で歌っていた。皆さんの前では歌えませんが。全部春歌だ  
から、けど、そうやって皆さん歌ったのではないかと思えます。そ  
うやって田舎の人たちでも歌っているうちになんとなくしみ込んで  
くるのです。体の中に覚えて来る、それが大事なのです。だから大  
切な書物は何度も何度も読んで体に覚えておくといい、そうすると

時々出て来るのです。

皆さんもだいたい長いこと生きてきています。人生はそんなに甘い事ばかりではないですか、辛いこともあるでしょう。なにかもう死んでしまいたいこともあるし、もう嫌だと思ふこともあるでしょう。その時にふつと出て来るのです。「いずれの行もおよび難し、我はとて地獄一定すみかぞかし」そんな言葉がふと出て来るのです。そういうふうにはハッと分かるのです。仏教も古典の勉強ですから、インターネットではだめです。何度も読むこと、そして体に覚えておくこと、それが人生でつまずいたときにふつと出て来る、その時に本当にわかる。

ですから田舎の人たちには大切な文章をそのままですと漢文ですから難しいのです。それをいつでも歌える『和讃』にして貯めておいて、そして『教行信証』が出版された七十五歳のとき、お弟子さんに書写させたのです。次の年、七十六歳の時に『和讃』を公にしています。

だから『教行信証』と『和讃』とは同じ課題を持っている書物だと考えて下さい。おんなじ課題ですが、一方は学会に、一方は田舎の人たちという、二つの書物が『教行信証』と『和讃』です。よくわかるでしょう。親鸞聖人は偉いでしょう。それだけでも。

#### 八十才以後の著作

後の著作は八十歳以上がほとんどです。みなさん聖典を持っていますね。この聖典に入っているのは、大体八十二・三歳くらいから八十五・六歳くらいがほとんどです。全部その頃に書いています。皆さんいくつになりますか。八十過ぎて著作するというのはいへんなことです。私は、今、一生懸命に本を書いています、私は七十一

歳ですが、しんどいです。二時間書きますと肩で息をする位しんどいです。だからたいへんなことだっと思えます。

全部息子の善鸞のおかげです。皆さんご存知でしょう。八十四歳の時に義絶するという事件が起こりました。ですから八十歳を過ぎてからずっと頭を悩ませるのです。義絶するという形で一応世間的には責任をとる。義絶というのは今のような義絶とは違います。ものすごくきついのです。義絶状というのは全部お弟子さんのところにいつているのです。なぜかわかりますか、義絶状というのは一通書いて自分の息子のところに届けるだけが普通と思うでしょう。ところが義絶状で今残っているだけでも十通近くあります。全部主だった門弟のところに出している。なぜか、それは義絶したということ宗門の中に全部伝えていく、たとえばもし善鸞が訪ねて来たら一宿一飯の恩義はだめなのです。義絶しているのですから追い払わないと。だから親としてはとんでもないことです。義絶というのは、社会的にそういう形で親としての責任を取らざるをえなかった。けれども、それだけで済むわけではない。思想とか宗教、仏教というものは一歩間違えたら人は死にます。だからそういう思想、仏教と違ったことを広めたのだから、「それは違うのだ」ということをもう一度言いなおさなければならなかった。だいたい、聖典にある、八十歳過ぎてからの著作のほとんどが、そのための著作と考えてもいいのです。だから「目も見えず候」とお手紙に書いていますが、八十八歳、八十九歳くらいだと、目が見えないと、今の皆さんは眼鏡をかけていますが、当時はめがねはないのです。電気もないのです。そんなところで本を書くというのはいへんなことであつたと思います。そんなふうにして著作を残した方です。

それは、僕らの分かるところでいうと、親としての痛烈な責任と、ご門徒さんたちにとんでもないことを広めてしまった、それを何と

か生きている間にきちつと書き残して、そして皆さんに伝えておかななくてはならないという執念だと思えます。そんなふうにして親鸞聖人は、この聖典の中にある著作を残しておられた。

そう思いますと『教行信証』と『和讃』は、善鸞の事件とは関係なく、若い時の、学会と田舎の人たちに伝えていくという仕事、その頃の著作だからとても大事な著作になります。

### 仏教入門

『教行信証』の会ということですから、何にも言わないのはどうか、と思つてちよつと言いましたが、今日は最初の会ですから、皆さんの顔を見ていても、どのくらい勉強しているのか、ほとんど勉強していないのか、訳わかつていないのか、訳わかつていないのか、僕はわからないのです。勉強していなくても仏教がわかつている人はいらぬのです。昔からばあちゃんたちは、まあすごい人がおりました。北陸のばあちゃんたちはお東、だつたら北陸です。

テレビに出たりして宗教の時間に難しい話をしていても、「そう、そう」、難しい話をして「南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏」と声をかけるのです。今頃は難しい話をするともんな寝る。だから仏教というのは不思議なもので、わかる人が聞いたらわかるのです。勉強していなくてもわかるのです。勉強しなくてもわかる。勉強してわかるのだつたら頭のいい人が先にわかります。心配しなくてもいいです。悪くても大丈夫です。勉強しないとつと悪いですが。

勉強するのは本物の教えに遇つた時にすれ違わないために勉強する。準備があるので。ボーとしてわかる事はない。みんなは自分の人生を真面目に生きようと思つて生きています。そう思うと人生の中に思い通りにいかないことがいっぱいあるのです。そう

してつまずいて、皆さん年いって、僕も年いっているが、この年まで生きてきたということは、よほど不真面目であつたのかもしれない。だいたい真面目に生きていたら若い頃に自殺をしていたでしょう。

だから人生は思い通りにならないことばかりです。そんな中で躓いて、「あ、そういうことか」と仏教がわかる。それは勉強しているからわかるので、仏教、宗教というのは準備がいります。準備をしなくてはいけない。準備もしないで分かるというのはそんなの一攫千金というのです。そんなことは仏教にはないのです。必ず自分の人生を真面目に生きるということ、その中でつまずいてどう考えたらいいか、どんなふうにも思つたらいいのか、悩む、そういう中で仏教がはじめて自分の身に落ちて来る。

ですから勉強することは大事だから、これから少しずつ勉強していきますが、今日はどうしようかなと思つて、さつきから見ているのですが、ヨッシャという気にならないのです。けれどもしようがないから、少し解説をしながら、人間とはどういうものか、(生活の中で、皆さん心当たりがあるでしょう、いろいろと苦しんだり悩んだりすること、そういうことが人生です)少し仏教の手前の方で、仏教にはいる入門のところ、少しだけお話をしておこうかなと思つています。

### 狼に育てられた子ども

皆さんどうですか、記憶があるのは四歳か五歳くらいからかな。僕は小学校に行く前です。四歳くらいです。三島由紀夫は「産湯を使つた頃から覚えてる」と言つていましたが、あれは嘘です。だつて意識がないから、意識というか…ものを認識する力がなかったら記憶はないはず。ものを認識する、物がわかるというのは、これは皆さん、実は、人間は「言葉」というのを持つている、言葉が

なかつたら人間にならないのです。

いやそんなことはないというかも知れないが、例えば『狼に育てられた子ども』という本が出ました。狼に育てられた、そうした人間にならないのです。孤児院に連れてきて、そして孤児院でその子を育てています。二人連れてきたのです。牧師さんが、なんとかして人間にしようと思つたのですが、ならないのです。毎日牧師さんの奥さんが体を起こして一生懸命なせてやるのですが、なつくのはなつくのです。犬が人間になつくように。だからといって人間にならないのです。どうしたら人間になるのかわからないでしょう、おもしろいでしょう。

いろんなことをやつたのですが、その中で有効だったことは、四つ足で走っていたから二本足で立つ練習をしたのです。最初はちよつと高い所に好きな食べ物を置いて、そうしたら後ろ足で立つでしょう。ところが四つ足で走っていたから足の付け根の部分が犬のように張っている。そして足の先にたこが出来ている。足がちやんとまつすぐになることが難しかった。けれども好きなものをやって立たせる練習をしたのです。そして最初は伸びあがつて立つのですが、少しずつ高くして二年かかった。最後は天井から籠をつるして好きなものをやると、後ろ足で立つて好きなものを取るまで二年かかった。つまり二本足で立つようになったというのが一つあります。

そうすると不思議なことがおこります。言葉を覚えだしたので、それまではいくら言葉の話しかけても覚ええない。犬とか猫とか一緒、わかることは少しわかる、けれども自分がしゃべるといふこととはない。ところが二本足で立つようになると不思議なことに言葉を覚えだしました。人間のあかちゃんもそうではないですか、一歳くらいで伝え歩きをします。今は、これがちよつと早くなったね。

一歳くらいになるとみんな立つようです。そうすると言葉を覚えるようになるのです。それまでは覚えません。だからきつと狼に育てられた子どもも一緒だったのでしょう。だから人間にとつても二本足で立つということは非常に大事なことになるのかもしれない。

言葉を覚え始めます、一番最初に言う言葉は何か知っていますか。もう忘れたでしょう、皆さんもしていたのですが、孫を見ていたらわかる。「マンマ」「ブーブー」と言うでしょう。これが一番最初。人間の一番大変な問題は「食う」です。それで皆さん苦労してきた、多分そうです。こうしてみると男性の方がたくさんおられますが、その世界で一生懸命これまでがんばって来られたと思います。ある意味ではそれはやはり戦いでしょう。自分が殺されるということになると、殺されてでも生きていくといつて戦ってきたはずですから「食うこと」が一番大切なのです。だから赤ちゃんも「マンマ」と「ブーブー」を一番先に言う。これは間違いないから、お孫さんが出来た時、お子さんが出来た時、皆さんも見ておいてごらん下さい。その次は何と言うか知っていますか。その次は周りの人を呼ぶようになるのです。「パパ」とか「ママ」とか「ジジ」とか「ババ」とか、友達の名前とか、これも順番が決まっている二番目です。分かるでしょう。

#### 子どもの優しさ

うちは女の子が二人生まれました。子どもの時は天才ではないかと思つて期待しました。子どもの時は天才的でした。涙が出るほど子どもに教えられることが多かった。大人が持っている、そういう感覚ではないのです。子どもの方が仏さんの世界を生きているのではないでしょうか。

僕は仏教を勉強していて、若い頃からそうですが、学者になりた

いなどとは思ってもいなかった。そんなことよりも「本当に自分の人生を生きたい」と言つて死にたかつた。そしてなんとというか、「いいことも悪いこともあつたけれども私が私でよかつたと思える教えが仏教だ」と思つて仏教を勉強してきました。

周りの人には優しくありたいと思ひました。もつと優しい人間になりたかつた。ぼくはいまだになかなかなれません。私の長女が生まれた時に、(保育園に連れて行つたり、連れて帰つたりするでしょう) ある時に保育園の先生に呼び止められて「あの・・お父さん、お嬢さんにもう少し優しくしてやってください」と言われました。これはショックでした。先生には分かるのだそうです。家で抱っこされたり、かわいがられたりしていない子は、よそのお父さんやお母さんが来たら走つていつて抱きついていく。和美はいつもよその人が来たら抱きついていく。それで「お父さんは何をしているか」と聞いたなら「お父さんはいつも勉強している」と言った。だから「お父さんは勉強もいけれど優しくしてやってください」と怒られて、私はどれだけショックだつたか、本場でショックで辛かつた、私は優しくしようとがんばつた。

夜、ご飯を食べると遊んでやらないといけません。家の長女というのは、あれは何か頭がおかしいのです。ガチャガチャしている、バケツの中にカニをいれたような、あんな感じですが。こつちから登つてこつちから降りて、こつちから登つてこつちから降りる、うわうわする、だから終いにはしんどくなつて「うるさいな」と怒つたらもうアウトです。一時間我慢して遊んでやったのがパーになるのです。どうしたらいいのでしょうか。

私の友達で仲のいい中川幸三郎という先生がいて、正月に僕の家遊びに来て、長女の和美と遊んでいた。彼は禿げているのです。背中に登つて彼の頭をぴちゃぴちゃと叩くのです、それを何回も繰

り返すのです。中川君は優しい人だからずっとそんなして遊んでいた。そしてあとから奥さんに聞いたなら「帰つて鼻血を出しました」と言われた。まあそんなことがあつて、どうしたら優しくなるのかと思つて悩んでいた頃があつたのです。何のために自分は仏教を勉強しているのか、一番かわいい自分の娘に「優しくない」なんて言われ、もう仏教なんか勉強しなくていいと思つたのです。いろいろ思う頃があつたのです。

保育園から帰るときに手をつないで帰るのです。パンパスを着ているでしょう。ドナルドダックのような恰好で歩いていると、僕の手を引つ張るのです。何処に行くのかと思つて。(田舎ではない京都ですよ、大都会です。京都は、全部アスファルト舗装してあります。ですから草が生えていません)ところがアスファルトの切れ目に小さな草花がピッと生えている所がちょっとだけあります。大人はあんなのを見ていない。うれしそうな顔をしてそこに座つてじつと見ているのです。そして僕に「お花さん、きれいやな」と言ったのです。この子は優しいなあと思つて僕は涙が出てきた。大人は踏みつけるような草花を「お花さん」と言った。よく気を付けて聞くと「お花さん」とか「犬さん」とか言うでしょう。ひよつとすると、この子たちは命はみんな繋がっているということを知っているのではないかと思つて、そういう世界というか。

僕はこの子に比べていつも自分の都合が先にあるのです。だから僕は都合がわるくなると「馬鹿野郎」と怒つてしまふのです。なんか世界が違うのではないかと思つて、その時に恥ずかしい話ですが、娘の横に座りこんで泣きました。この娘は偉いやつだと思つて、仏さんみたいなのやつだと思つて、その時は感動しました。天才だと思つてね。今はもう四十過ぎになりましたが完全にくるくるパーになつています。

言っていることが判るでしょう。子どもたちの方が「犬さん」とか「猫さん」とか「お花さん」とか言って、命はみんなつながっている、同じ命だということをよく知っている。そんなところからしか人の優しさは出てこないのです。「自分が」「私が」と言っているときは都合のいい時だけ優しくできるのです。都合が悪くなるとすぐに腹を立ててしまう。これは世界が違うのではないかと思つて「ああ偉いなあ」と思つたことがあります。分かりますかね。

#### 「私」を意識する

話を戻しますと、まず最初に食べ物の事を言うでしょう。その次に周りの人の事を呼びます。パパとかママとかジジとかババとか。話はこれからで、うちは子どもが二人とも娘です。風呂に入れるのが僕の仕事でした。だからいつも風呂に入れていましたが、そのころになると違いが分かってくるのです。「お父さん、どうしてちんちんあるの」とよく言われた。「和美はどうしてちんちんないのかな」と言っていました。「わんわんにあげたのかな」とか、本当にそう言っていました。「今度、高島屋行ったら買って来てな」とも言っていました。そんなふうの違いが分かるようになる。周りを呼ぶようになりません。

「周りを呼ぶようになる」というのは分かりますか、これは食べる次にしんどいのは人間関係なのです。周りの人を呼ぶようになって、「パパ」とか「ママ」とか言うでしょう。周りの人間関係が人間にとつていちばん大変なのではないのですか、だから一番大事なことは食べることですが、その次は人間関係に苦しむのです。子どもにの時にちゃんとそうなっているのです。

そして周りの人を呼ぶようになると今度は違いが分かるようになってきて、その頃になると、自分が好きなおもちゃとか、好きな友

達とか、好きな洋服とかがわかるようになります。そして言葉によつて世界ができていく、だからその頃の保育園に行っている子どもたちの言葉を覚えるスピードがものすごく速い。だから世界の方が先に出来ていくから、耐えられなくなつて熱を出します。知恵熱というのです。それは言葉によつて自分の周りの世界がずっと広がってくるのです。Aちゃんにあつたら、Aちゃんのお家に行けるようになる。そうやってどんどん広がってきて、そしてその世界に対して自分を意識するようになります。そして多分二歳半から三歳くらいになつてはじめて「私」というようになります。

だから「私」というのは今の言葉でいうと「自我」です。親鸞聖人の場合は「自力」という言葉で表されている。親鸞聖人の「自力」というのは、そういうものを全部含めて自力という。「私」というのは、最初から「比べる」ということが本性になつていっているのです。周りが分かるようになって、その周りに対して私を意識するようになったのだから「私」という自我は必ず「比べる」ということが本性です。そういうふうになつて人間になつていきます。

「私」と言えるようになったら、自分のものと人のものとの区別がつくようになります。お孫さんを見ていたらわかるでしょう。僕のところの一番下の孫が小学校に行くようになっておもしろくなくなつた。三つぐらいまではおもしろかつた、ボーとしていた。お菓子を取られてもニコツツと笑つていたし、兄ちゃんにたたかかれてもニコツツとしていた。

この子はアホかと思つたが最近シャキツとしてきた、人間らしくなつてきた。お菓子を取られたら文句を言っている。「これは俺のじゃ」と言つてけんかしている。きちつと「私」と言えるようになる、自分のものか他人のものかちゃんとわかるようになって、そして私たちと同じような人間になつていくということになります。そ

うすると必ず私たちは「私」「私」と言う。自分を「私」「私」と言うけれども、「比べる」ということが本性であります。わかりますか、ここに人間の独特の苦しみが生まれてくるようになっていく。

私は貧しい寺に生まれまじから坊さんになるのが嫌だった。そして一緒に勉強した友達はみんな出世していくから、僕だけなんてこんなにしていかなくてはならないのか、それが辛かった。けどよく考えるとそれは「比べる」ということです。それが本性になつていたなあと今は思います。皆さんどうですか、そこが他の命と違うところですか。

#### 綿毛は空を舞い、落ちたところがたんぼの一生の地

猫とか犬とか草とか花とか同じ命ですが、人間だけが他の命と違うところ、分かりますか。今日も私は来る時に、家の猫にお別れを言ってきました。かわいいです。ぼくはペットなんか飼う人はアホやと思っていました。二、三年前に猫を飼うことになつて、可愛いですね。これはこししか言われないが奥さんよりかわいいかもしれない。白い猫でかわいい猫、きれいな猫です。一回見せてあげたい。

あいつが「自分はなんで白に生まれたのだろう。なんで黒でなかつたのか」と悩んでいるのを一回も見ることがない。偉いですよ、猫は、そう思いませんか。「なんでこんな白いのか」といつて鬱病になつて首をつつた、そんな猫はいないでしょう。自殺するのは戦争するのは人間だけです。わかりますか。猫がヘルメットかぶつて戦争に行くといったことはない。そう思うと、人間は立派で偉いと思えうけれども、ひよつとしたら犬や猫の方が偉いかもしれない。

いつも本人です。猫、ずっと猫です。猫に生まれてずっと猫です。白い猫なら白い猫のまんまで。ニコッと笑つて、猫で生きて猫で死ぬのです。偉いと思いませんか、ずっと本人です。人間だけ

がいつも「もつともつといいものになりたい」で、本人になつたことがない。どうですか、「なんで私はこうなのか」と思つたことはないですか……。そこに人間独特の苦しみが生まれてくるのです。言っていること分かりますね。だからお釈迦さんは「かわいいそうだ」と思つたのです。

人間はアホではないか、犬やら猫やら木や草の方がよっぽど幸せです。与えられた場所、与えられた所で生きています。僕は最初から生まれたところが気に入らなかつたから、北海道に行つて教え子のところに寄つたら、座敷に筆で書いたものが貼つてあつて、それにこう書いてあつた。「綿毛は空を舞い、落ちたところがたんぼの一生の地」 私はそれを見て涙が出そうになつて、どうしても自分の場所を自分の生きる場所と言えなかつた。いいでしょう。「綿毛は空を舞い、落ちたところがたんぼの一生の地」、僕は涙が出そうになりました。何時も人間は反対だから、そんなふうになれないのです。そこに人間の苦しみがある。それを見抜いたのはお釈迦様の悟りだけです。どうですか、わかるでしょう。それを何とかして他の命と同じようにしてあげたい、というのがお釈迦様の大悲、わかりますね。

だから「比べる」ということが本性だということ、もう一つは比べると必ず「もつといいものになりたい」、「このままではだめなのではないか」と思う。与えられた場所、与えられた場所があるでしょう。学生のときは勉強が嫌いだつたが学校に行かなくてはしょうがない。こんなのはだめではないかと思つてがんばつてきた、一生懸命。どこでもそうでしょう、会社に行つてもそう、お嫁さんに来ててもそうです。何とか良いお嫁さんになろうと努力してがんばる、つまり、必ず理想主義になる。「自我」とか「自力」とか親鸞聖人が言う場合は、こんなことを全部含めてこう言っているのです。わか



りますかね。

これは解説したらあかんことですが、皆さんが仏教がわかった時に世界がひっくり返るような感動をもらうのです。恐らく大分あたりまでは走っていくと思う。うれしくて、じっとしておれなくて、別府くらいまでは走っていくだろう。それは世界が変わるのですから。今まで自分が正しい、自我を中心にして私の世界、人間の世界だと思っていたのが、全く世界が変わるので、それはうれしくてかなわない。比べる必要がない、そういう世界を何とかして皆さんに手渡したい、これがお釈迦様の大悲です。わかりますかね。

こつち側の問題だから、これはわかるでしょう。心当たりがあるでしょう。だからそれをお釈迦様が見抜いている、お釈迦様の悟りだけが見抜いているのです。そういう人間を何とかしてひっくり返して、比べる必要のない世界を与えたい、「今の自分でいい、このままでよかった」と言えるものにした。「私が私でよかった」といえるほど幸せなことはないよ。そこに大安心があるでしょう。そういう世界を何とかして手渡したい。これが仏教なのです。

丁度時間です、ちよつと休憩しましょう。

## 《二席》

それでは、もうしばらくお話をしましょう。最初に僕は申し上げることを忘れておりまして、このお寺さんでお話するのは二回目なのです。最初は田畑先生のご両親の五十回忌の時にお話をさせていただきました。最初は田畑先生のご両親の五十回忌の時にお話をさせていただきました。この度のこの会も田畑先生が開いてくださって、たいへんな舞台を作っていただいたことに敬意を表します。先生の想いの籠った会です。でなんとかお話をと思ってお話をさせていたいただきますけれども、話を分かりますか。こつちが皆さんが分からない

のです。だから皆さんの顔を見ながら話しているのです。これはつらいですよ。申し上げていることは分かりますね。

### 比べるー人間の本性

今、申し上げましたように、人間が人間になった時に、人間そのものの中に「比べる」ということが本性です。それが他の動物と違つた苦しみを持つのです。もう一つは比べるとどうしても「もつと立派になりたい」というものを持ちます、皆さん子どものころから、そういう気が有つたのではないですか。誰でもそういう気があるでしょう。そろそろ死にかけてですが、それでもなくならないのではないでしょうか。ぼくもなくなりません。

けれどもよく考えてごらん、人間の心ですつと変わらない心なんてそんなにないです。結婚式の時に「永遠に愛します」とわけのわからんことを言つても、その時はそう思つたのでしようが、あれは言うたらあかんと思います。すぐ変わる。私は教え子の結婚式にたいがい行きましたが、三分の一くらいは言いましたかな、あれはあかんと思う。というのは、あれだけ決心して「愛します」と言うのも変わるでしょう。それでも今いう「もつと立派になりたい」とか、「もつと頑張らなくてはいけない」という気持ちは生まれた時から命が終わるまでなくなるのとはちがいますか。それは不思議です。

僕は次女が生まれた時、保育園に連れて行って、そこから車で大卒に行つていた、二歳半か三歳のころ、やつと「私」と言える頃、ある時、車から降りて「保育園に行つてくるよ」というから「行つてらしゃい」と手を振つたら、「お父さん」という「なんや」と言つたら「あいちゃん、保育園でがんばってくる」と言つた。私は「頑張つてこいよ」といいながら、「あいつ、何をがんばってくるのだろう」と思った。保育園というのは何か頑張ることがあるのでしょうか。あ

の頃からもう頑張らなくてはいけないと思っっているのです。そして死ぬまでそれが抜けないでしょう。それは、しかし、何なのでしょうか。人間の中に変わらない心なんてないです。ところがそれだけは変わらないよ。なんなのでしょう。

普通の考え方からすると、そういう気持ちがあるから、たとえ小学校から頑張って勉強しようとか、向上心につながる。それで勉強する人もいればスポーツをする人もいる。そんなにして立派な人間になっていく、これが普通の人間ですね。だから悪いことではないけれど、その気持ちが死ぬまでなくなるといふことは、つまり、その気持ちを本当に満足するものがなかったといふことでしょう、分かる、そうでしょう。たとえそれで立派になって成功したと言っても、だからといってこれで十分であるとか、うまく言えないのですが「存在そのものの喜び」というか、「嬉しい」というか、「生まれてきてよかった」とか、「私の人生辛いことも苦しいこともあったけれど、丸ごと私の人生でよかった」とか、そういう喜びは他の喜びとちよつとちがうですね。

うまいこと言えないけれど、「欲を満たす」といふことは出来るかも知れない。ある意味で言えば。だけど何か、「五百円拾ってうれい」のはちよつと違うのです。「この間拾ったらうれしかった、そういうのとちよつと違って、何か「生きていくことがうれしい」とか、「生まれてきてうれしい」とか、「ああこれ死んでいってもいい」とか、なんかそういう命の底からの本当の喜びにはつながらない。たとえ成功しても、結局は、例に出して大変失礼な話ですが、田中角栄さんのように総理大臣になっても、最後にはアル中になって悶え死んでいくという事にしかならない。

宗教心―世を超えたものを求める心

たとえ成功してもならないでしょう。成功しなかったらもつときつい。それで負け組になって自殺をしていく人は一杯います。ところがその正体は何なのでしょう。それは「世間の何ものを持つてきても絶対に満足できない心が人間の中にある」といふことです。地位や名誉や金や、きれいな人を見てこの人と一緒に死んでもいいと若いうちは思うけれども、「あの時に死んでいたらよかった」思ふことはなんぼでもあろうけれども・・・。

だからお釈迦様は出家したのです。この世のどんなものを持つてきても絶対に満足しない心があるのだ。それは一体何を求めている心なのか、お釈迦様は出家をしたのですが、「出家」といふのはわかりますか。家出とは違うのです。家を出るのはいつしよですが、家を出てこの世を超えたものを求める、この世で何も満足できない。成功しても失敗しても、どっちにしても何も満足できない。つまりこの世で満足するものは何もない。その心は実は世を超えたもの求めている心なのです。ということが分かってお釈迦様は出家したのです。もしあのお釈迦様の出家が個人的な出来事であつたら、仏教はこんなに広まつていないと思います。

だから逆にいうと、今言うように、この世の何ものを持つてきても絶対満足しない心が誰の中にもある。「それは実はこの世を超えたものを求めている心なのだ」とお釈迦様は教えている。ところが私たちはそれが分からないからかえってそれで苦しんでいく。金を儲けたらみんながちゃんと尊敬してくれるのではないか、立派な車に乗ったらみんなが尊敬してくれるのではないか、いい家を建てたらみんなが尊敬するだろうと、世間の方ばかり尊敬させたがる。一番問題なのは自分が自分を信じていないからです。けれど、そんなふうになる。そしてかえって苦しんでいく。

宗教心というものは、本当の意味で宗教的にちゃんと着地をしな

いと、宗教的な形をとるとは限らないのです。ある時には金を求めたり、ある時には地位を求めたり、ある時には世間の・・・、だつてぼくらが目に見えるのは世間のものしか見えないから、そこで何とかして満足させようとしても、それは本来満足できない心なのです。無理なのです。だけどそれしかないから、ぼくらは一生懸命やつてきた。皆さんもそうでしょう。

ところがそれはお釈迦様の目から見たら、実はこの世を超えたものに触れなければ絶対満足できない心なのです。こう言つていいかな。わかりますか。そこに仏教というか、宗教というもののとても大事な意味がある。なんでこれだけががんばつてきたのに、今まで何をしてきたのだろう。夜寝るときにそう思うでしょう。

(皆さん夜寝られますか、僕は夜寝られないのです。ほんと寝られないのです。寝たらいいのですが、それがまた寝られないのです) 今言うように金はあればあるほどまた欲しくなるのです。ホリエモンは世界中の金を集めようとして失敗したでしょう。ああいう要求は、ひよつとしたら、欲しいものを永遠に求めるといふことは、永遠なるものに触れたら金は一銭もいらぬのかもしれない。人間にはそこが分からないのです、言つていふこと分かりますか。皆さんは狂つていなく立派だからそんなことはないでしょう。

私はいろんなことで狂つてきた。あの時に死にそうになつてあんなことをしたけれども、あの時に本当は仏教がわかるはずであつたのに・・・と思うことがいっぱいある。金や地位や名誉に狂つて、そして一生懸命やつて傷ついて、人を傷つけて、何でこんな生き方しかできないのだろうと思つて、なんべん泣いたことですか。その時に仏教を求めていたのです。それがどうしてもわからなかつた。

そうでしょう。だからお釈迦様が出家をして、皆さんが本当に求めていゝのは実は世を超えたもの、それを何とかして伝えたい、そ

れが仏教です。だから仏教は「世を超える」ということがまずあるのです。

#### 嫌なものと同じく

親鸞聖人の『教行信証』も、他の宗派もたくさんありますけれども、全部「世を超える」、これが仏教の一番の目標である。お釈迦様の「世を超える」ということを目標にした時に、まず頭に浮かぶのはやはり、「出家して、修行して、世を超えた覚りを覚りなさい」これがお釈迦様の説く仏教です。「世を超える」、これは先ほど言つたように、この世は必ず「比べる」ということです。そしていつも気が付かないけれども、「あの人はいい人だ」とか、「この人はいい人だ」とか「悪い人だ」とかいろいろ言うでしょう、それは全部自分を中心にして「良いか、悪いか」を言つていゝだけの話なのです。この「自分を中心にして」ということは普通思わないから、そんなことを思うことは問題にならないから、「あの人はいい人」と言つたら「そうだ、そうだ」と意見の合う人が仲間を作つていくのです。

この場合、いつも「自分」というものが後ろに隠れていて、「善いか悪いか」、「勝つか負けるか」、「損するか得するか」、「好きか嫌いか」、全部そうやつて判断していく。だから自分が生まれた所も、自分で嫌だと思ふ、納得がいけない。この顔も納得いかないので、僕が一番嫌いな父親とまるつきりそつくり、嫌だつたほんとうに。

今はよかつたよ。つまり、そういう本当に嫌なものに向かいあわないと仏教は分からないのです。今、若い人は楽な方ばかりに向かうでしょう。あれは苦労させた方がいいのです。苦労させて、理不尽でも何でもいいのです。「ぼかやろう」と言つてわけがわからなくとも、酒飲んで暴れても、いいではないか。「それでいい」とうまくけりつけて、気分が悪いからといって、それでいいから、世の中そん

なことばかりです。(何を言っているのかわからない・・・)

先程から何度も言っている。僕が言いたいのは「人生で嫌だなあと思うこと、つらいなあと思うこと」、それがチャンスです。この世を超えるものに触れないと。この世のもので行き詰っているのですから。行き詰っているときにチャンスに決まっている。だから辛い事、悲しいこと、それを大事にして、その時が仏法によつて超えていくチャンスです。それが「世を超える」というものに触れるチャンスなのです。でも今言うように人間はどうしても「私」というものが出来上がってしまったいて、そしてそれが隠れていて、いつも相対的な形でものを考えていく。

### 空を悟る道

この「私」というものを超える」というのはどうしたらいいのか、それは一つは修行によるのです。お釈迦様と同じように出家しなさい。修行によつて、私というものを超えるような、大乘仏教だつたら「空を悟りなさい」「世を超えるような覚りを開きなさい」というような道がたてられていきます。これは当然です。

禅宗なんかはそうです。空の覚りを覚りなさい。両手でたたいて「どつちが鳴った」という訳の分からん質問をします。若い雲水が一番奥の部屋の老師のところに行くと、「どつちが鳴った」と問われる。「どつちが鳴った」と言われても、両の手が合わさった時、空気がふれてパンと聞こえるのですから「真ん中です」と答えたら「帰れ」と言われる。また一週間悩むのです。もう一つしかない。「右です」と言うと「帰れ」と言われる。また一週間悩むのです。残りは一つかない「左です」と言うと「馬鹿、帰れ」と言われる。もう言うことがないから泣くらしいです。

それでも先輩の雲水に引張って行かれるので寺の柱はツルツル

らしいよ。一汁一菜といつて食べ物も少しでしょう。あれを戻したりするそうです。血を吐いたりする人もいます。どう思いますか。一回行ってきたら、頭が狂ってくるよ。それでもまた行かなくてはいけません。「どつちが鳴った」、何か言わなくてはならない。「真ん中です」と。「お前なんべん言っているか、帰れ」と言われる。

そのうちにわかってくるのです。それは人間は理解する、それも自分を中心にして言葉で理解していくでしょう。言葉で理解するということを僕らは正しいと思つています。それがちよつともおかしいとは思わないのです。

うまいこと言えないけれど「昨日、僕はリンゴを食べてきました」と言うと皆さんどう思いますか、これで通じます。皆さんは赤いリンゴを想像するでしょう。しかし、もしかしたら、青いリンゴを食べているかも知れないよ。そうしたら事実とちがいます。ということとは、ものを言葉で考えるということとは、自分を中心にした言葉を映像で頭の中に浮かべるのです。それでわかつたつもりになつていくのです。だからみんな違うことを考えていても、一応、リンゴとかメロンとかスイカと通じるけれど、事実が事実とはならないのです。わかりますか、つまり自分を中心にして言葉で考えるしかないのです。だからそれが絶対正しいと思つていいのです。自分が経験したことも正しいと思つていい。

けどそれは危ない、だから両手を打つて、「どつちの手が鳴った」というのは、言葉でものを考えて解説したら「真ん中に来て空気が・・・」となるのです。しかし解説して理解したとしても、鳴っているということをほんとに言い当てることにならない、だからなんべんもなんべんも帰すのです。そのうちに向こうもわかるのです。「そうだ、言葉で考えるということとは正しいと思つていたけれども事実は違う、正しいということはない。老師がそういうことを教えて

くれているのだ」ということが分かってくるのです。そうしたらもうオツケーです。老師が「どつちがなつた」「右です」「オツケー」と訳の分からんことになる。

要するに心身脱落というのです。自分とか、言葉とか、考えるところを超えた、と老師が認可したら、「どつちが鳴った」「上の方で鳴った」「オツケー」。

言葉がないから、そんなふうにして「世を超えた」ということを教えようとするのです。おもしろいのです。

### 聖道の道

京都で僕はまだ若い頃でしたが、プロテスタント、カトリックと浄土真宗と禅宗と有名な人が集まって宗教者会議というのがあったのです。真宗からは、私の先生の寺川俊昭という先生が話をしたから一緒に行きました。真宗は言葉で、教義という言葉で伝える。まず南無阿弥陀仏、これは言葉です。ただし、言っておきます、（これからだんだん言っていきますが）この南無阿弥陀仏というのは人間の言葉ではないのです。人間が作った言葉ではないのです。仏様の方からの言葉です。これだけは違う。だけど言葉ということでは一緒だから、その南無阿弥陀仏という言葉を中心にして教義というのが立てられている。

ところが禅宗というのは言葉がないのです。その頃の宗教学会の先生は京都大学の上田閑照という先生でした。（キリスト教もプロテスタントも真宗も全部言葉があります。全部教義を説明するので。その人が出てきて宗教学会の会長だったから日本の偉い先生だったのです。）その人は言葉がないからどうしたと思う。傑作でした。アーと出てきて・・・ワツとにらんで、体をがたがたと揺らして、バンと机をたたいて「これが禅だ」と言った。頭おかしいのではない

かと思ったが、禅宗の坊さんだけが「なるほど」と頷いた。これは本当です。訳わからないことです。

だから世を超えた悟りを自分のものにするというのはものすごく難しい。けれども、私たちの頭に一番にあるのは、さつき言った理想主義というか、まずお釈迦様と同じように出家しなさい、そしてお釈迦様と同じように世を超えた覚りを求めて修行をしなさい、という道が立てられています。この聖道門というのも、大経の覚りを求めていく道も、ほんとうは詳しく言うといろいろあるのですが、とにかくそういう道が立てられている。（今日ははじめだから、皆さんを見ながらしゃべっているから、ちょっと耐えられそうだと思います）

ところがお釈迦様のもとで出家した人がインドでもほんとに少数でしょう。ほとんどの人は出家もしないし、さつき言ったように世間の中で一生懸命に金とか地位とか名誉とかに狂っていつて、そして苦しんでいくわけです。（時間がたつて先におきますが）、その心が、はつきりと本願の教えによって「無限なるものを求めている心があった」というふうには決着がつかないと、人を死ぬまで苦しめる。苦しまなくても、死ぬまで満足しないで、なんか不満を残して死ぬ。それは当たり前です。

だから逆に言えば、「生まれてから死ぬまでずっと私たちの中から吹き上げて来る、命の深い所から吹き上げて来るような気持は一体何なのだろうか」と、これがはつきり分かるということが人間の「救い」なのです。それは「無限なるもの」に触れて「無限を求めている」という心がある人間の中にある」ということがはつきりすることです。

そしてもう一つはこの身は世間の中に生きていますから、世間の中でやはりきちつとやらなくてはならないというのがはつきり

する。

そういう横軸というか世間の中できちっと果たしていかなければならない責任と、無限なるものを求めていく心と、ちゃんと交通整理がつかないと、かえって苦しんでいく。さつきから言っているように馬鹿になる。宗教心があるからこそ、金に狂ったり、地位に狂ったり、名譽に狂ったりする。だからそういう意味では今言っている心が何なのか、ということがわからないと救いにならないと言ってもいい。それは『教行信証』を読んでいくときにだんだんわかってくる。

### 五十二段―修行の段階

ともかく、今は「悟りを求めるために説教を聞いて修行をしなさい」「人間はいつも欲で動いているからその欲を全部捨てていこう。断惑証理、惑いを断つて真理をたのむ。欲を一つ一つ捨てていって、自分の中にある真理というものに目覚めていきましよう」、こういう道が立てられています。ですから修行も段階的にならずとあるので

す。せつかくだから言っておきますが、これ十ずつ段階があるから五十二の段階のステータスがあるのです。あの馬鹿たれの麻原照光が言っていたでしょう。ステータスが上がるとか下がるとか言うのはこれをまねしている。修行によって少しずつ上がっていく、これを全部真似しているのです。十信・十往・十行・十廻向・十地・等覚・妙覚。最後の十地からが菩薩。これは、親鸞聖人は『教行信証』の中に『菩薩瓔珞本業経』を引用してちゃんと書いているところがある。だからまたそこにいったら言うけれども、まあ予告編なのです。十地から菩薩だから聖人(者)になる、だから聖道門という。(十信を外凡、十住・十行・十廻向を内凡という)

凡夫が一生懸命修行して聖人になっていく道・聖道門。聖道門の菩薩になるのです。等正覚の聖人の位が弥勒菩薩、ところが親鸞聖人の『教行信証』には、念仏者は弥勒と等しいと言うでしょう。だから修行をしなくても、本願の教えに遇ったものは自力の人の等覚と同じなのです。こういうふうにあります。これもすごいことです。十信から十行までは凡夫、ここ(十信)が一番出来の悪い外凡、皆さん・どの辺におると思いますか、外凡!、「ブー」です。十信でも出家しているのですから、出家して受戒をする、戒律を守りますという。それをしないと十信にはならないのです。だから法然は出家して、生涯戒律をたもったから比叡山の源空と名乗るでしょう。だから十信からは出家しないといけないから、皆さんは出家もしていないのだからその手前です。

このように聖道門の仏教は立てられている、これはとてもよくわかる。今日は時間がないからあまり詳しく言えないけれども、インドに行くと、ブツダガヤから向こうを見ると前正覚山という山がある。お釈迦様はそこで六年間修行して山を下りる。骨と皮になつて下りて来る。そして尼連禪河の河を渡れなくて倒れている。そこでスジャータという人に乳がゆを貰って息を吹き返すのです。それから一カ月ほどしてブツダガヤから少し離れた金剛山というところで覚り開く。誰が見ても、お釈迦様は出家をして苦行をして覚りを悟りました。だから、こういう道が立てられたのは当たり前です。だから真宗というか浄土教以外の仏教はぜんぶ聖道門です。

### 浄土教―凡夫のまま救われる道

ところがお釈迦様は僕らみたいのがいるから困ったのです。出家もしないし、「欲の塊」と言われもニッコと笑って。凡夫は欲を持つということが生きていくエネルギーみたいになつていていでしょう。

何かを求めて走り回って、そのことで生きていくような気がしている。気が付いたらボロボロになっているのですが。そんな人は「出家しなさい」と言ってもしないし、お釈迦様は困ったのです。そんな人を他の仏さんは全部見捨てたのです。だけど阿弥陀さんという仏さんはちょっと変わっていたのです。みんなが見捨てた人々の方が多いのですから。そうして見たら訳のわからんことで走り回って苦しんで、若いうちはいいが、足が痛い、耳が聞こえない、そして頭がボーとしている、何のために生きてきたのかわからない、それを見たらかわいそうで仕方ない。だから出家しないでも、修行をしなくても、その人たちに何とかして伝えたい、ということをお釈迦さんには思ったのです。また、第一に仏さんはどんな人も救わないと仏さんにならない。お釈迦さんの最後の望みはそれだったのです。

だから今度は、僕らが凡夫のままでも救われる浄土教というものが説かれた。これは、まあ簡単に言ったら南無阿弥陀仏を称えなさい。南無阿弥陀仏は人間の言葉ですか、南無阿弥陀仏だけは違うのです。人間の言葉ではない。

### 命の名前

大谷派で面白かったのですが、三年ほど前だったか、子どもたちの報恩講があるのです。乳児から小学校六年生くらいまで、子どもたちばかりが二百人集まった。僕たちのような年寄りはいなかったが、でも部長たちがおもしろがって、「先生、出る」と言われるから出たらおもしろかった。

くそ餓鬼ばかりでしょう、やかましいの。「静かにしろ」というと「べー」という。でも読経はえらかった、本堂で四年生の子が導師をしてやるのです。そして「南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏」と称えるのを見たら、ほんとに冗談抜きで胸がぐつと来ました。子どもたちだ

けで勤行しているのを見て涙が出そうになってえらく感動した。

南無阿弥陀仏を言ったのです。

なんで南無阿弥陀仏を聞いたら感動するのか。

仏さんの教えにちゃんと手を合わせている、えらかった。

「へんだ、へんだ」という。ほんのくそ餓鬼です。「キリスト教もある」というから「ここに来てキリスト教をいうな」と言った。ずっとそんなのです。

けど、「南無阿弥陀仏が優れている」と言っても通じないと思つて、「爺の話聞け」と言つて、「君たちの一番大事なものは何か」と聞いたたら、あのでんでに勝手なことを言っていた子どもたちがみんな口を揃えて「命」と言つた。

「命はそんな大事か」

「大事や、だって命死んだら痛いもん」と訳の分からん事を言う。

「命でほんとにいいのか」

「命だ」

「そんならわかった、そんな大事だったら一回見せてくれ」

「無理」

「それなら、見せてくれなくてもいい、命はどこにあるのか」と聞いたたら、

いろいろ言っていた、おもしろいな。

「頭」という子がいた、これは高学年の子どもです。

それから「心臓」と言うた子もいた。

一番面白いのは五つくらいの子が、僕の前に立つて「鼻の中」と言つた。

「えらいなお前、息しているものなのだから」と言つたら「うん」と答えた。

そして「みんなが言うように命は一番大事です、しかし見せてく

れと言ったら、『無理』と言った、だから仏さんが南無阿弥陀仏という言葉をくれたのです。南無阿弥陀仏というのは、一番大事だけれども見せることが出来ない、触ることもできない、そして説明することもできない本当の命の名前を南無阿弥陀仏というのです」と話すと

「へー、じじ、南無阿弥陀仏とは命の名前か」

「そうや、自我よりもつと深い、生れた時は自我はないのですから、仏さまの命を生まれてきたのです。だから命よりもつと深い、本当の命の名前を南無阿弥陀仏と言うのです」と言ったら

「へんだ、へんだ」という子と「へー」という子がいた。

そういうことです。

「南無阿弥陀仏」というのは仏壇に書いていあるが、あれは皆さん一人ひとりの自我を超えた本当の命の名前です。それを南無阿弥陀仏というのです、だから南無阿弥陀仏を称えていたら、自分の自我よりもつと深い命の世界、それはさつき言ったように、犬も猫も花も草もみんな友達の世界、命は誰も比べることが出来ない、そして出来の悪い私たち一人ひとりを、誰も文句を言っていない、しっかりと命が支えている。そういう人間よりもつと深い南無阿弥陀仏の命を教えようとして、仏さまの方が苦労した。そのために何とかして南無阿弥陀仏の意味を私たちに教えようとして四十八の本願というものを説いてくださった。

仏さんの悟りが言葉にまでなつて、そして世間を生きる私たちの迷いを破つて、ある時、

(皆さんはこうやつて勉強会に来ると、言ったことを理解しようとかんばるね。難しい何だろうと思つて聞いている。出来るだけ理解してください、今日は出来るだけ分かるように話したのです。少

しは分かつたでしょう。二三日したらまた忘れるから)

ある時「そうか」と言つて分かる時がくるから。その時は理解と違うのではなくて、仏さまの四十八の本願の教えは全部自分の事を言つていたのだということが分かる。

人間が分からないこと

何か事があると、私たちは目が外に向いているから、外ばかりに文句を言うでしょう。僕もそうであった。「生まれたところが悪い、父親が悪い」、全部外にばかり文句を言つていた。死ぬほど苦しんで最後に先生の教えが突き刺さつたかな。

「地獄のもとはお前の自我にある。いつも自分を立てたい根性、負けたくない根性、それが地獄餓鬼畜生を作つている」

仏様の教えは、人間が逆立ちをしてもわからない、そのことを最初から見抜いて

(人間の知識をどれだけ積み重ねてもこれは分からない。東大に行つても京大に行つてもわかりません。)

その分からないことを仏さんが先に見抜いて、光明無量という南無阿弥陀仏のはたらきを四十八の本願として説かれている。

四十八の本願の一番初めの本願は「自分が阿弥陀如来になつた時に国に地獄・餓鬼・畜生があつたら自分は仏様にならない」と誓つています。普通だつたら「え、仏さんの世界には地獄・餓鬼・畜生がないのか、いいところだ」と思う。島田紳助という人が「それやつたら、そこに修学旅行に行こう」と言つたらしい。それくらいしか私たちに分からない。

ところがよく考えてごらん。仏さんの世界に地獄・餓鬼・畜生があつたら仏さんの世界ではないもの。阿弥陀さんは世間を見ていつているのです、仏さんの世界にあるはずがない。「地獄・餓鬼・畜生



が)あるのは世間です」ということを教えているのです。それが分からぬ、だれぞそう教えている。

あのトランプがややこしい。最近はその韓国の文さんもややこしいね。あいつらが悪いと思う。違う、あなたが悪いのです。あなたの根性が地獄・餓鬼・畜生を作っているということが、ある時、ツカつと身に突き刺さる。その時はじめて、今まで一生懸命理解しようと思つて来たけれども、仏さんの教えは全部光という意味を持っている、とわかる。そういう出会いから始まります。

#### 南無阿弥陀仏の命に帰る

浄土真宗は、相対分別を超えた永遠なる命、世を超えた命、光明無量・寿命無量、智慧の光によつて相対の分別を破つて、永遠なる命に私たちを帰らせる。生きることも死ぬことも、どちらも命でありませぬ。南無阿弥陀仏の命に帰らせていただく。

私を育ててくださった先生はガンになつて亡くなりましたが「ガンも私が頂いたのであります、生きることも仏様にいただいた命であります。死ぬことも仏様にいただいた命であります。全部南無阿弥陀仏の中にあります」と言われた。うれしそうな顔をして亡くなられました。そのように私たちの相対分別の考え方を破つて、生きることも死ぬことも南無阿弥陀仏の命の中にある、そういう無量の命を教えて一般の生活者を何とか仏教の覚りに立たせたい。

聖道門は修行する私たちが苦勞をするのです。浄土教は教えを説くお釈迦さんと阿弥陀さんの方が苦勞をする。だから「五劫のあいだ思惟した、兆載永劫に修行したのです」と書かれています。皆さん一人ひとりの命の中で兆載永劫に修行しているのです。だからさつき言つたように宗教心としてあるのです。それが阿弥陀さんの心です、仏さんの心です。それに気が付いたら救いになる。

今日は最初です。だいたい今申し上げたようなことを親鸞聖人はきちつと『教行信証』に書いておられる。毎回毎回きちんと着地するかどうかはわかりませぬ。少しずつ読んでいきます。

が、今言つたように、親鸞聖人は「人はどういつたら救われるか」「何者として君は生きるのか」「どういつたら死ぬのか」これらの問いをずつと問いながら『教行信証』にきちつと、「私たちが救われる道はここしかない、南無阿弥陀仏しかない」ということを一生懸命説いておられます。それを少しずつこれから読んでいくことにします。付いてくれますか。

今日はぜひいぶん雑駁に話をしたけれども、少しはわかつたでしょう。時間がきましたので一回目はここまでで終わつておきましょう。

#### 《質疑》

《質問者Ⅰ》「人は苦しむというお話をされました。私たちは苦しむとどうしても逃げたいと思ひます。その「逃げる」ということを、仏教ではそれを「受け取れ」というように言われると思うのですが、「背負え」ということも聞いたことがあるのですが、私たちは苦しいと逃げる、避ける、ないようになりたい気持ちになるのですが、それは違うのだと言われるのですが、そのあたりをお話しいただきたい」

《延塚先生》「そこはたいへん難しいところですよ。というの、逃げれるうちは逃げたらいい、世界中逃げまわつたらいい、何処まで逃げても自分だけは付いてくる。だから人間というものには最後まで、あなたが言つたように引き受けられない。人間の方には救いなんかありません。だから皆さん、救われようなんて思つて来たら大

間違いです。これから、だんだん、どつぼにはめていくから。人間の方に救いなんか無い。命が支えています。人間が引き受けるものになるうというようにすぐ思う。仏法の話を知るとよく分かっていない坊さんがそういうことを言う。そんな立派なものになれるくらいなら浄土真宗はいらない。最後まで逃げていく、逃げられなくなったら自殺してでも逃げたい。ぼくはそうだった。だから人間の方には引き受ける力はない。だけど「お前の命をちゃんと引き受けているのがわからんか」と僕は怒られました。僕の先生はそう言った。「お前が引き受けるとは言わない。だけど、お前の命はちゃんと引き受けているではないか、それが分からんか」。南無阿彌陀仏の命を無駄にせん、そういうことです。そこに、この世のことはこの世で解決をつけようというようなのは宗教にならん。はじめてその時に異質なものが出て来る。自分の引き受けられないということを通して、全く違った、初めから引き受けている命がある。だから今まで生きてきたのです。「その南無阿彌陀仏命に頭を下げる、それがわからないか」と言つて僕は怒られました。だから人間が人間のことを引き受けられるくらいなら仏教はいらない、と思います。」

《質問者2》「一般的には宗教というのは現世利益を求めるもの、または来世での利益を求めるものというのが、皆さんの考え方にあるのではないかと思うのですが、そこらあたりはどう捉えたらいいのでしょうか。」

《延塚先生》「たぶん難しい事を考えておられるのだと思います。だけど、私たち、お互いにですけれども、一番の問題は、やはり、「この世で命を全うしたというものに会いたい」、さっき言ったように、初めて比べる必要のないものに会って、比べる必要のないということ

とは「私は私でよかった」というものになる。それを仏道では「仏になる」という言葉で言う場合もあります。あるいは「往生浄土」という言葉で言う場合もあります。しかしいづれにしても、今言ったように、いいことも悪いことも人生の中にはあるけれども、「その全部は私自身であつて」と言えるようなものに触れていく、それが一番大事なことです、親鸞という人はそれをストレートに言っているのです。それを後から勉強した人が、これは現世だとか、行ったこともない当来だとか、訳の分からん事を言つて解説する。そんな解説を全部排除したのが親鸞です。

そうではなくて「今」、「ここ」で、私たちが生きて死んでいけるということはどういうことか、それをストレート言っている。そんなふうに一度頭を切り替えて、これまで勉強してきた人は屁理屈で今のようないことをよく言うのです。勉強していることは尊いことだけど、そのことではかえつて分かることが分からなくなる、というのが親鸞の立場だと思ふ。ですから、そういう意味で現世とか当来とかいうことはあまり言わないで、私たちのストレートな願い、それは、さっき言ったように世界中の人が願つていると思ふ。

「人として生まれてきてよかった」と言いたい、もうちよと言えど「私が私でよかった」と言いたい、そう言えるものが一体どこにあるかということストレートに言っている。それを後から解釈する人たちがそんなふうに解釈されますが、ここではそんなにとらわれないうで、僕が今言ったことをストレートに考えていただいたらいかがでしょうか。しかし、おっしゃっていることはわからないでもありませんので、その都度、その都度、質問してください。よろしくお願ひします。

《質問者3》「先生の話で今いわれたように「私は私でよかった」と

いうところまで自分で思っているのですけれど、後はどうしたらいいのでしょうか。残りは後一か月の命だと考えて、どういうことをすればいいのですか。生まれてよかったです。お念仏に会えてよかったです。だからあと残りはどうするのですか。」

《延塚先生》「そう喜んでいたらいいではないですか。喜んで生きてみなさい。喜んで生きるといえるのは世間では、都合のいいことが起こつたらうれい顔をする。都合が悪くなると辛い顔をするのです。どつちとも喜びなさい。ガンになつて「あーうれい」と言いなさい、周りの人はびつくりするから。遂に頭がおかしくなつたと思うか、あのばあちゃんさすがだと思われるか。あの人は仏教があつたから、私もあんな人になりたいときつと言うだろう。どうもせんでいいです。そうそうにうれいことはうれいと言つたらいい」

《質問者》「悲しんではいけないのですか」

《延塚先生》「悲しんでもいいよ、けどよ、ばあちゃんがこの世で一番嬉しかったのは仏教にであつたことでしょう。それはそういうふうに伝えなさいといけません。そうしたら、どうしたら伝わるかなというのを少し考えたら、僕が言つたように、僕の先生が亡くなるときに「ガンになつてよかつた。ガンも私が頂いたのであります。生きることもいただいたものですが、死ぬこともいただいたものがあります」と言つて、うれいような顔をして南無阿弥陀仏と言つて死んでいった。私は感動した。それで坊さんになりたいと思つた。そんなふうにしたらいいと思う、ありのままではだめ、ありのままだと欲のたらいまわしになる。仏教に触れたものは仏教に責任をもたないといけません。それでいい。」

《質問者4》「ありがとうございます。お話を今までずっと田畑先生からもおうかがいして、どうしても乗り越えられない一線という

もの、どうしてもここから入つて来ないというのがあつて、「なんだろう」といつも考えるのですが、先生が前に田畑先生のご両親の五十回忌の時、先生の子ども時代から反抗して、どうしても親から行つてくれと言われて大谷大学に行かれて、そこでの生活、そして学長に部屋に呼ばれてお話を聞いてということ、先生はそこで自殺まで考えたということをお話のとおつしやつたと思います。そこまで追い込まれないと本当の仏教に触れるということはなかなかむずかしいものなのでしょうか。」

《延塚先生》「それぞれだと思ひます。ゆっくりわかつていくというところもある。ずっと聞法しているうちにだんだん分かつてくる。まだ元気だから、そのうち足は立たない、腰は立たないようになる。ああやっぱり他力だなあと思うかもしれない」

《質問者》「私は先生よりも年は一つ上なのですが、先生よりも先に逝くかもしれません」

《延塚先生》「そこはなかなか難しいところですよ」

《質問者》「最後まで会えないかもしれない」

《延塚先生》「遇っているのです。遇っているけれどもわからないだけの話です。必ず分かるから。高史明という作家がおられまして、大変親しくしています。高さんがあるとき同じ質問をされた。先生は自分の一番大事な息子さん自殺したのです。小学校六年生の時に、期待をかけて一生懸命育てた子どもが自殺をした。頭が狂うほど苦しんだ。「頭が狂うほど苦しむないと仏教は分からないのですか」と聞かれた。先生はどう答えたかというのと「頭が狂つても仏教はわからないのです」と。

うまいこと説明できないのですが、「人生で一番大事なことが仏教なのだ」と思つて本気で聞法をしておけば必ずわかります。もし聞法をするということがなかつたら、高さんのように息子が自殺をし

でも仏教はわかりません。それは人生経験だけでいうと祇園のお姉ちゃんの方がずっと苦勞をしている。けど、やはり、その人が何を思っているか、そして何を大事にしようとしているか。仏教を本気で聞きたいという気持ちがあれば絶対に分かります。なぜなら仏教は事実をいつているのですから。

事実がわからないほど頭がいいのです。そのうちボケてきますから必ずわかります。「身がいうとおりに生きてきている」はずです。皆さんみんな顔を見たらしわがあるでしょう。それだけしわがあったら、今まで、自殺しようとか、逃げようとかいう苦しいことがなかった人はいないと思う。その時、いちばん助けになったのは身近な人です。友達とか両親とかが「がんばんなさい」と言ってくれて、なんとか頑張ってきた。そのうちにその時ぶつかって苦しかったことを忘れて命の通りに生きてきている。だからその歳まで生きているのです。頭の考えていることはたいしたことはない、身は、命は、事実ですから、必ず分かりますから、心配しないでいいです。」

《質問者5》「私、二年近くになりますが、延塚先生のお話のきつかけというのは田畑先生の冊子に書かれたことからです。それから一年くらい経ってから「どうして延塚先生だったのですか」とお聞きしましたら、その返事が「延塚先生を円徳寺にお招きして、そして聞法を広めたい、お寺の皆さんと一緒に聞きたい。そしてご夫婦一緒にお参りしたいという願がある」ということでした。

そしてこうも話されました「延塚先生はよく学習されています。たくさんの人を知っていますが延塚先生ほどよく勉強された方はおられません。それも私たちにわかりやすくお話してくださいませ。」という返答が帰ってきました。私は田畑先生に感謝と共に、田畑先生の願いが今日はかなって、その機会が出来ましたこと、本当にあ

りがとうございました。お礼が言いたくて立ちました。延塚先生、本当にいい出会いをさせていただいて感謝しています。有り難うございました。」

《延塚先生》「それは田畑先生の言い過ぎだわ、僕は期待にお応えできるかどうかわかりません。けどまあ親鸞聖人の『教行信証』を、すばらしいですよ、先生のお心を覚えておいて『教行信証』と一緒に読んでいきましよう。」

文責は編集者の田畑正久にあります。